

文化人類学と生きる 仕事で、家庭で、人生で

川口幸大（東北大学）・齊藤友紀（株式会社メルカリ）・伊藤真実（仙台市役所）

本発表では、大学における文化人類学の学びが、仕事や家庭生活など、その後の人生の局面でいかなる意味を持ち、実際にどのように働いているのかを、文化人類学を専攻した卒業生の具体的なエピソードから考察する。

大学再編が進められるここ数年、とりわけ文部科学大臣の発言も相まって、文系学問の社会的有用性についての議論が盛んになっている。諸点に賛否両論あるところだが、私たちが専門とする文化人類学について言えば、植民地主義や戦時体制のバックアップと不可分に発展してきたこの学問は、当初より極めて顕著な実用性を胚胎していた。

その後も、応用や開発などいくつかのディシプリンが打ち立てられ、現場への参画や社会還元が唱えられてきた。ただしこれらはいずれも、文化人類学の研究・教育・実務を職とする専門家が自らの知見を活用することが目されていたという点で共通している。また、今世紀に入り日本でも耳にするようになった公共人類学は「公共領域における人類学の貢献をこころみようとするもの」(山下 2014: i)であったが、その背景には“public or perish”というピーコック (Peacock 1998)の有名なフレーズに表わされるような、公共領域に貢献しなければ未来はないという人類学（および文系学問）をめぐる、とりわけ北米アカデミズムの切迫した状況があった。したがってここでもその担い手として想定されているのは、すでに人類学を職業とする、あるいはアカデミックキャリア途上の研究者である。

ここ数年、目にすることが増えたもう一つの有力な方向性は、企業・実務のエスノグラフィであり、本学会の研究大会でセッションが組まれたり、ラウンドテーブルで言及されたりしている。その特色は、アンケートに代表される量的データでは補足され得ない、微細でかつリアリティをともなった現場のデータを集積し、商品開発や組織マネジメントに役立てるところにある。確かに、エスノグラフィもフィールドワークも、少なくとも現在までのところ、そのコピーライツの有力な保持者が人類学だと認知されてはいるのだろうが、現地でメモを取ったり、当事者の声を拾ったりという技術以上の、ディシプリンとしての人類学がどこまで要されているかはいまひとつ不明瞭だ。

考えてみれば、大学院、特に博士課程の進学者は減少していて研究者養成は青息吐息だが、逆に言うところでは、学部卒、あるいは長くとも修士修了の学生にと

って、他ならぬ文化人類学の学びがいかなる意味と意義を持つのかについて、私たちは真摯に向き合い、何らかの形で言語化しておくべきだと発表者は考える。

今回は二人の話者に文化人類学の学びのその後を語ってもらおう。その一人である齊藤友紀は、境界の引かれ方を相対化する人類学的知見のあり方とは対照的に、いわば境界線の必然性を追求する法曹の世界に入り、その違いに向き合う自己を他者として俯瞰している自分に気がつく。他者性を抱え込んだ自己認識が仕事の現場で功を奏することもあれば、苦しさを生むこともあると吐露する。

もう一人の話者である伊藤真実は、仕事と子育てを当たり前のこととしてこなす自己に対して、少なからぬ驚嘆（両立してすごい）や同情（お金に困ってるのね）や非難（子どもがかわいそう）が向けられることに戸惑いつつも、相手と、相手から見た自己をとともに他者として捉え直すことで、その状況に面白味を感じている。

両者に共通しているのは、自らが主体でありながら他者としてのポジショニングと視点取りをし、状況を俯瞰しながら楽しむ、あるいはやりすごす自己を見出している点である。ともに即効的かつ直接的にこれができるようになったという類いのものではないが、文化人類学を学んだ者ならではの物事の捉え方と考え方が働いているのではないだろうか。他者を介した自己の他者性への気づきからは、周縁にある者やことへ思いを遣る所作が導かれるであろう。公共人類学や企業のエスノグラフィが目指す学問と生の関係を「文化人類学で生きる」(living by anthropology)とするなら、こちらはさしずめ「文化人類学と生きる」(living with anthropology)とでも表せようか。アカデミアやビジネスの場に限定されない、文化人類学的な知の活き方であると言えるだろう。

文献

Peacock, James

1998 “Public or Perish?”, A paper presented as the session, “Defining a Public Interest Anthropology” (97th Annual Meeting of American Anthropological Association).

山下晋司(編)

2014 『公共人類学』東京：東京大学出版会。

キーワード 応用人類学、公共人類学、企業のエスノグラフィ